



TITLE:

雑纂

AUTHOR(S):

CITATION:

雑纂. 日本外科宝函 1939, 16(6): 1227-1249

ISSUE DATE:

1939-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/205123>

RIGHT:

雜 纂

テオドール・ビルロートの書簡集から

ト 庵 老 生

62. 在バーゼル大學、ゾムン教授に宛てゝ。

[1875年 明治8年 (ウキンより 46歳)]

『……拙者の脂肪心臓は進行して來た様だ。そして海水浴は禁物と申渡されたが海の空氣を吸ふのは許されてゐるし一杯だけの酒ならよいと云はれた……生命と云ふものは短かいものだよ!』

樂岡子! B. の宿痾である脂肪心臓がぼつぼつ自覺される様になつて來たらしい。

63. カールスバード、セーケン教授夫人に宛てゝ。

[1875年 明治8年 (ウキンより 46歳)]

註。溫泉醫師の夫人で知人の間柄であつたらしい。

『……私は數日後に貴家を訪問する心算でありますが何分多忙なので次週になると思ひます。手術すべきものと手術された者の事共が私の胸に一ぱいになつてゐます。そしてそれが年々歳々増加してゐます。今日も數時間前に或る女に或る手術を施しました……怖ろしい手術でした。今夕それを再診しなければならぬのですが其成績が心配です。助かつてくれてゐたらよいかと祈つてゐます。それで如何に我々の技術が不完全であるか告白したいのです! 一國の文化が他國へ輸入されるに多くの歳月を要すると同じく我々の學問技術の進歩も考へて見れば遅々たるものであります。……』

樂岡子! 多情多感なる B. 氏よ! だ。或時には大俗人になつたり、或は哲學者的になつたりする性分である。そして最も幸福なる時間は彼が大ピアノの前に坐つた時であらうと思ふ。

64. 在伯林、ランゲンベツク教授に宛てゝ。

[1876年 明治9年 (メラン市より 47歳)]

『……先生! 私の喉頭カタルはどうも輕快致しませんがさればとて思ひ切つた喉頭切除にはまだ早いと思ひます。何分にも言論の際には痙攣性の咳嗽が頻發して數時間繼續するので困つてゐます。其の他に輕度の氣管枝カタルがありますので高聲の談話を避けなければならぬので當分メラン市に沈黙と適當な散歩で靜養して居りたいと思ひますので、とても伯林の學會への出席は出來ない始末であります。不惡御容赦を願ひます。……』

樂岡子！ B. は何とか彼とか理由を附してまた外科學會の出席を斷つてゐる。塙國に於ける外科の御大は伯林の外科醫團の仲間入りが嫌であつたらしい。それとも他に事情があつたのかは解らない。此時ランゲンベツクは65歳であつて獨逸外科界の霸王であつた。

65. 在ウルツブルヒ大學，リンドフライシユ教授に宛てゝ。

[1876年 明治9年 (ウキンより 47歳)]

『……醫者が病床に横はると全く魯鈍なヒポコンデリー患者となるものである』と君は嘗て云ふた事があつたがそれは本當だ！ 拙者は頑固な氣管枝カタルに悩んでゐる。勿論拙者だつて何時かは死すべき人間であると云ふ事は知つてゐるがどうも神経が過敏で仕方がない。それは多忙過ぎるからだとも考へてゐるがさればとて高い階段などは平氣に飛び上つたり飛び下りたりすることが出来る……夜はモツプス(犬の一種)の如くによく眠れるが唯普通人よりは少し脂肪が多いと云ふだけだ。今日も重症老女の腹部切開術をやつて、手術後10年前と同じやうに手術臺から安々と荷ふて行つてやつたよ。こんな具合だから自笑せざるを得ないのだ。……』

樂岡子！ B. は一方では自分の病氣を心配してヒポ的になるかと思へば一方では平氣で仕事の出来るのを自慢してゐる。但し仕事の最中は病感を忘れるらしい。

66. 在ウキン，ドクトル，ノイトルブエルに宛てゝ。

[1876年 明治9年 (ウキンより 47歳)]

『……貴下の「外傷治療に就いて」の業績御送附を感謝します。貴下の考へらるゝ如く拙者も亦同感でありますのはどうも Lister 氏の理論には何處かに缺陷の點がある様です。他の多くの學者も同じ様に考へてゐるらしいです。勿論其方法は大いに用ふべき點はあると思ひますし又 Lister 氏の示した通りの方法でやれば無害であつて應用すべき價值はある事もあるとは思ひますが私としては之を公評するには他の機會を待たうと思ひます。……』

樂岡子！ B. の保守式と L. の新式との戦場が擴大された様である！

67. 在ハルス大學，フオルクマン教授に宛てゝ。

[1877年 明治10年 (ウキンより 48歳)]

『……昨日ペーテルスブルの往診から歸つて來た。獨逸國境の通過旅行も面白かつた。外科學會にも出席したが大した混雜だつた。怒濤だつた。そして興味ある 進歩の騒動と云ふものだつた！……ペーテルスブルへは最初の旅行だつたが魯國は確かに將來歐洲に於ける見込のある國だと考へた。……』

樂岡子！ 62年前の魯西亞を見た B. が今日の魯西亞に再旅行したらどうだらう？ 進歩？ 退歩？ スターリンに聞いて見るがよい。そして塙太利亞が亡んだと聞いたら B. は卒倒するかも知れない。

68. 在ゲツチンゲン、バウム教授に宛てゝ。

[1877年 明治10年 (ベルヒテスガーデンより 48歳)]

『先生！今日の獨逸に於ける外科の進歩は實に驚く程であります。然し今日獨逸大學の外科に於ける學生の教授法には些か反對であります。それは唯だ學生に外科的治療方式だけを教授して居りますから大學を出た醫者はただ一の技工者になるに過ぎない事であります。そして何處に學術的外科學の研究の門が開かれて居りませう。それでは外科學の進歩と云ふ事はないと申したいのであります。……私は大學生を出来るだけ實地觀察の方面へ又科學的研究方法へ導いて自己批判の能力を養成したいと心掛けてゐます。……若しも一度何處からか一つのヒポテーゼが發表せられると人々は忽ち批判なしに其の方へと走つて行きます。それでは駄目であると思ひます。あの長足の進歩をしたと云はれる脾脫疽に關する智識もまだまだ十分には解決出来てゐないのに解決終了したかの様に信じてゐるではありませんか！ だから實驗の上に實驗，研究の上に研究すべき考へ方を養成するのが必要だと思ひます。……私は昔時は外科學に於ける輕騎兵隊であり工兵隊でありましたが今日では重砲兵隊となつて了ひました。……』

樂岡子！若い B. は輕騎兵であり老ひたる B. が重砲兵であると云ふのが中々面白い。此手紙の發信所はベルヒスガーデンと書いてある。そして其處でこんな愚痴手紙を書いたが同じベルヒスガーデンから今日に於ては Hitler の獅子吼が飛び出してゐる。

69. 在ウキン、ドクトル、ミクリツに宛てゝ。

[1877年 明治10年 (ウキンより 48歳)]

註。1877年ワルシャウに於て外科學教授 G. がある事情で左上腿上部を他人から庖丁で刺された珍事があつて大出血を起した時に其地の醫者が Art. fem. superf. を負傷面と共に結束して一時止血したが10分後再び大出血を起して來たので今度は Art. fem. communis を結束した。すると壞疽に陥り後に敗血症死となつた事があつた。當時其地の醫界では此醫者は誤れる手術をした結果であるとし此際 Art. fem. profunda を結束せずに Art. fem. communis を結束したが爲めに壞疽に陥つたのだとの非難の聲が大きくなり醫界の大問題となつてワルシャウ醫學會の大論争とまでなつた時に其地の醫事新聞記者から B. に其批評を求めた時の回答文である。

『……大腿上部に於ける刺傷の際に傷面を廣く開放して動脈血が Art. fem. superf. から出血するのか又は Art. fem. profunda から出血するのかを判斷するのは至難の事である。だから最初 Art. fem. profunda の上部を結束しても其末梢血管から出血する事もあるから Art. fem. profunda の上部1cmの場所を結束せないと後出血するのは當然である。然し此結束の結果壞疽が出來ると出來ないとは同血管の副枝血行の發達如何によるものである。が其他に栓塞の發生とか靜脈の損傷とか云ふ二次性の變化とか心臟の力とか等々其他の諸條件によりて定まるものである事だけを申上げる。……』

樂岡子！今日なれば裁判醫學の問題でもあるだらうが若しも樂岡子なれば何と召さる。
畑違ひの老卜庵は知らぬ事知らぬ事。

70. 在ハイデルベルヒ大學，ツエルニー教授に宛てゝ。

[1878年 明治11年 (ウキンより 49歳)]

『……君は縫合用絹絲を石炭酸で煮沸してゐると云ふ事だが拙者はも早や腸線絲を使用しない。それは傷面が化膿しない場合には絹絲も傷面の治癒と同時に癒合するものだ。然し化膿の場合には腸線絲も吸収されずに放り出されてしまふ。拙者は2ヶ年來リスター式綿紗を捨てゝ唯濕性繃帶使用の新法を試みて居るが何時も結果がよい様に思ふ。又本年1月(1878年の末)來乾式防腐繃帶もやつてゐる。つまり君のとフォルクマンのとの變法無菌法だが其結果もよい。(Aseptic と云ふ文句は B. の書簡集中初めて B. の使用した術語である)……先頃化膿性膝關節炎を刺針して膿を排除して5%石炭酸で洗滌して見たら其病人は5時間後に死んで了ふた。解剖して見たら全大腿部筋肉が腰部關接部に至る迄石炭酸で滲潤されてゐたし又其血液中に凝血があつた。それで病理教室は大騒ぎさ。そして石炭酸中毒例として公にしようと騒いだが拙者は病症日記の閱覽を拒絶してやつたので事が收まつたと云ふものだ。だから何時も經驗と云ふ奴が大事だと云ふのだ。……』

『……拙者のチモール使用の經驗はまだ浅いがチモールガーゼを製造させて使用してゐるが製造所は拙者の名をつけて賣出したいと云ふ希望だが拙者は拒絶した。それは其材料が高價だし又拙者の經驗が少ないからだ！兎に角、含脂肪、含樹脂のガーゼの方が石炭酸ガーゼ及びチモールガーゼよりは有効でないかと思ふ。然し一度 Sepsis が初まれば1%のチモールだつて無効だし又其%を増加するには多量のアルコールが必要となつて來るから之も駄目である！』

『……卵巢切除術をスプレー應用の下に行ふと云ふ事は拙者には理解出来ない事だ。現に拙者はチモールスプレー應用で3人卵巢切除をやつて見たが其内2人は死んだし残りの1人も一時化膿したがやつと助かつた次第だ。……』

樂岡子！B. が始めて Aseptic. Antiseptisch と云ふ文字を使用してゐるが、細菌學のまだ現はれて來なかつた時代に於ける外科醫の苦慮は並大抵ではなかつた事が解るではないか。

71. 在ハイデルベルヒ，ツエルニー教授に宛てゝ。

[1878年 明治11年 (ウキンより 49歳)]

『……拙者は近頃無チモール、無石炭酸で唯だ鯨油とコロフォニウム含有の繃帶材料を使用してゐるが其結果は甚だ良い。……拙者は之迄石炭酸中毒死の5例と頻死に陥れた4例を覚えてゐるし助手間に石炭酸中毒尿を出したのがあり、多くの不快を經驗してゐるから石炭酸使用禁止令を出す様に通達したのだ。……』

72. 在ウルツブルヒ大學, リンドフライシユ教授に宛てゝ。

[1879年 明治12年 (ウキンより 50歳)]

『……膽石疝痛で御惱みとの御手紙だが同情するよ！拙者はチュリヒ在任時代にやつた事があつた。其發作の疼痛と云つたらたまらない事を知つてゐる。當時拙者は將に腹膜炎を併發せんとした程だつたがカル、ス鹽を常用してから其病苦から全く免れる事になつた。君のは多分尿酸及びオキサール酸過剰のためだらう。拙者のは膽汁酸の過産の爲めであつたらしい。カル、ス鹽は少くとも1ケ年は常用せないと駄目だ。毎朝1コップの熱湯に1茶匙の天然カル、ス鹽を溶かして飲めばよいのだ。食物の攝生なぞは無用だよ！そして1茶匙位のカル、ス鹽では下痢症は起さない。之は拙者の忠告と云ふものだ。君も拙者も肝臓の智識に就ては全く素人だが。……』

樂岡子！外科醫が友人の外科醫に對して内科疾患に就て建策してゐる。そして2人とも此方面は素人だ素人だと云ふてゐるのも面白いと思ふ。

73. 在ウキン大學, ドクトル, ミクリツに宛てゝ。

註。B. の助手。

[1879年 明治12年 (ウキンより 50歳)]

『……巴里へ旅行となア！行くべし行くべし、巴里を充分味ふて見るがよい。特に其郊外は美しいぞ。十分に含味するがよい。巴里はウキンに 甚だ似てゐる都市だ。唯だ反日耳曼氣分が嫌いだが然らざれば面白い奴等の集團だ！拙者は矢張伊太利亞が好きだ……それから君が若し英國へでも行くなれば例の防腐繻帶の事も注意して觀察してくれ給へ。……』

74. 在ライプチヒ, ヒス教授に宛てゝ。

[1879年 明治12年 (ウキンより 50歳)]

『……世間で拙者が Lister 氏法の敵であると云ふ評判があるさうだが馬鹿な話だよ。ウソだよ。拙者はリスターとは何時も個人的に相互に親しく音信もしてゐる。唯だ拙者はリスター法の盲信者には反對してゐるだけである。此處ウキンと云ふ土地は 塙國型の精神の充滿してゐる處であるから冷たい批評の流行する所と考へ給へ。それはロキタンスキーとかスコダーとか云ふだんまり屋の影響なのだ。拙者はスコダーの様に六ヶ敷しい診斷とか治療法の論題に關係する場合には何時も「我々の知識はまだそれ迄に達して居らない！」と云ふ一言で中斷してやるので調和が出来ない爲めでもあるがそれも又年が老いた爲めだと思ふてゐる。……拙者はリスター氏法の普及によりて實際醫學上大なる進歩を來たしたと云ふ事は決して否定せないのだ！元來現代の手術的外科學と云ふものは全外科の 1/3 位なものだ。其他の 2/3 の外科即ち口腔、直腸、膀胱等の外科手術になると Antiseptisch と云ふ方法は問題に出来ない局部

ではないか?! だから拙者は Antiseptic と全外科手術とを同一のものとするのが行き過ぎた議論だと思ふてゐる。……そして尤も悪い事は多數の業績、演説、供覧等々を外科學會の會場ではやが上にも美裝する事が問題だと思ふ。それは外科學の進歩に非ずして退歩と云ふものだ。然し拙者は最早此潮流にはとても逆行出来ないから拙者は拙者として拙者の流儀を守護してゐるより外はないと思ふてゐる。そして唯だ文筆を戲して靜居してゐたいと思ふてゐる。』

樂岡子! 之が50歳の B. の防腐法とそして當時の外科學の趨勢に對する感想であつた! 時は流れるです。そして今も流れてゐます。

75. 在ウキン、ドクトル、ミクリツに宛てゝ。

[1880年 明治13年 (ウキンより 51歳)]

『……君の Antiseptik に就ての業績は一讀した。

(Mikulicz, Über die Anwendung der Antisepsis bei Laparotomie
mit besonderer Rücksicht auf die Drainage der Peritonealhöhle.)

先づ其第1章に於て此問題の理論的説明を書いてあるのは 甚だ良いと思ふ。それが抑も此問題の根本なのだ。……然しだ其事たるや別に新しい事項ではない。……だから其總論をもう一度十分に讀直して 考へる 必要がないでもないと思ふ。そして一度之を公にして讀直して見ると必ず書き直したいとか除きたい 場所とかを 發見するものだ。それでは既に遅しと云ふものであるよ。……』

76. 在ハイデルベルヒ大學、ツエルニー教授に宛てゝ。

[1880年 明治13年 (ウキンより 51歳)]

『……君の方式で子宮剔出をやつて見たが成績不良だつた。特に送管が困難なので苦勞した。ミクリツは腹腔を持続的灌流法でセプシスを豫防しようと試みたがそれも駄目であつたさうである。』

77. 在ハイデルベルヒ、チエルニー教授に宛てゝ。

[1881年 明治14年 (ウキンより 52歳)]

註。此時 B. は C. をウキンかブラグの大學の教授に推薦する爲めの教授會に於ける選舉投票日であつたらしい。

『……イヤハヤ今夕は大争鬭だつたよ。そして君が大多數を制した事になつて Kaposi が落選になつたがまだまだ大敵があるので 油斷が出来ないと云ふものだ。政府は何と云ふかだ! 此處には君の友人も多いし又拙者も 充分縁の下の力持になる心算だ! ……君がウキン大學に招聘される事になつたら内々で承知して 貰ひたいのは 収入の事なのだ。近頃は住宅費は公給

でない事を。そして月給と恩給の事だが10年前に君が既に正教授になつてゐたら年俸2200フランそれに800フランの附加俸がある、合計3000フラン(5500マルク)、それに講座給が1ヶ年約2500フランそれにPrivat klinikのことで……拙者の例から考へたら……第1年には12000—15000フラン、總計17000—20000位の収入となるだらう。それでウキンでまづ気軽に生活は出来るとしても決して満足すべき金額ではない。勿論君の妻君の切り盛り一つに依るのは云ふまでもないが。……』

78. 在ハイデルベルヒ大學, ツエルニー教授に宛てゝ。

[1881年 明治14年 (ウキンより 52歳)]

註。C. はウキン招聘には餘り同意せなかつた。又 B. の盡力が無效となつて C. のウキン招聘は止めとなつた事に就いての手紙である。

『……拙者は馬鹿だつたよ。そして君は遂に勝つたと云ふものだ！此世の馬鹿者相手には戦は出来ないよ、神々でもだ。……拙者は之迄14年間もウキン大學の爲めに働いた。そして多數の學生を教育したし、又後繼者を養成せんが爲めには並々なれぬ努力だつた。此拙者の失敗は猶太人とツェコ人の仕事だよ！政府の當事者は彼等の主張に賛意を表したから仕方がない、盲目の爲政者だよ！死せるヅムライヘルが活ける時と同様に死後に至つてもまだ拙者を追撃してゐると云ふものだ。多分そんな事になるのだらうかと心中窃かに考へはしてゐたが腹が立つて仕方がないよ。……だから拙者が養成した人物は今後決して奥太利國へは推選せないよ！御兩親は定めて失望したらうが仕方がない！如何にも同情する。其失望の慰めの代償として君の下腹部腫瘍に就ての研究と其業績をもつと擴大する事だ。拙者のMagenresectionの成績は明日發表する心算だ。今日縫合糸を除く心算だ、反應のない腹部切開の治癒だ。然し少しやり損つたのには腹が立つ。……』

樂岡子！B. が抑も最初にMagenresectionをやつたのは實に1881年(明治14年)1月29日であつた。此最初の手術に成功して一度は治癒したと考へた病人は同年5月24日に癌腫再發で死んで了ふた。此事は今年を去る事、實に58年前の事である。

79. 在ゲツチンゲン大學, バウム教授に宛てゝ。

[1881年 明治14年 (ウキンより 52歳)]

『……私が手術を致しました胃切除(Magenresection)の患者は今日で14日経過しますが此種の外科手術としてはまづ成功した事です。……今日少し肉類を與へました。然し主要食物は牛乳であります。然し患者は手術前に既に衰弱に陥つて居りましたので恢復が甚だ遅々であります。それから褥瘡が厄介なものです。だから斯様な手術はもつと早期に行ふべきも

のだと考へました。現今政治的方面は甚だ氣に入りません。チェコ黨が多數です。そして之が爲めに二元的から三元的になつて了ひました(註。オーストリア、ウンガールン、ベーメン(今日のチェコ?)の三民族を云ふのであらう)。そして私の最も優秀なる門弟共は皆埃太利亞へ取られて了つた譯です。……他日此風潮は何んとか變化せなければならぬのですが……政治的合唱歌と云ふべきものはつまらないものです。……』

樂岡子! 58年後の今日オーストリアも、Hitler の恫喝によりてチェツコも分解した。そして獨逸黨が幅をきかして來た! 若しも B. が今日まで居つたなれば確かに拍手して喜んだであらうと思ふ。

80. 在ハイデルベルヒ大學、チエルニー教授に宛てゝ。

[1881年 明治14年 (ウキンより 52歳)]

『……拙者のやつた喉頭部分的切除術に就いては2例の経験がある。然し拙者の経験によると咽喉癌腫なるものは嚥下機能とか又は發聲障碍は起さないものだと考へる。特に喉頭部の粘膜組織が健全であれば咽頭全剝出は有效であると信ずる。……君の腔部よりの纖維腫剝出手術方式は賞賛に値すると考へる。だが此處ウキンの女性共は餘りに肥満過ぎてゐるから診斷さへも出來ない位だよ。……』

樂岡子! 癌! 癌! 昔時も今日も内科醫も外科醫も癌で苦しんでゐる。

81. 在ハイデルベルヒ大學、チエルニー教授に宛てゝ。

[1881年 明治14年 (ウキンより 52歳)]

『……拙者の様な年頃になると家庭にあつて夫として、又父として死後の事も考へて置かねばならなくなつたと云ふものだ。幼兒であれば今後何とかなるだらうが拙者の3人の娘の爲めには拙者百年後の事も考へて置かなければならぬのだ。こんな事を考へると性質として拙者はそればかり氣になつて仕方がないのだ。それで1890年になると(註曰、9年後の事を云ふてゐる)拙者は丁度30年間大學に就職してゐた事になる。(若しも拙者がそれ迄生きて居ればだ!)。其時には斷然退職する心算である。實は拙者にはウキン大學は大嫌いであつたのだ。それはウキン大學の爲めに善かれかしと働いてやつても無益であつた。そして拙者が多少理想的の事を云ふても同僚達、又埃國政府は唯だ嘲笑するだけだ。馬鹿な話だ。大學は泥海と化してゐるのだ! 拙者の晩年に入りて之から先へは飛び越えられない堤防が築かれてゐる氣がしてならない。君! 少々手紙の文句が悲觀的になつたがそれは決して誇張してゐるのではない。實際なのだ! ……拙者の教室では Wölfler u. Mikulicz 2人が奮闘してゐるから拙者の様な老ぼれは無用の人間なのだ。M. はポーランド人なのだからポーランド語でやれるのだが此處では獨逸人に化け過ぎてゐる様だ。大部分の手術は此2人がやつてくれてゐるから甚だ便利だ。……

手術の数は君の在奥の時に比すると非常に増加してきて2時間半乃至3時間は手術してもまだ1/3程の患者が残つてゐると云ふ始末なのだ。……複雑骨折の病例は數年來非常に減少して皮下骨折も1ケ年に4乃至6例位なものなので此種の臨床講義の材料が少ないのに困つてゐる。……拙者の脂肪心臟に就ては要心してゐるから餘り人生を享樂する事は出来ないのだよ！……』

樂岡子！奥太利亞國の外科の最高の位置に在る B. にも種々な不滿と不平がある。兎角此世は不平な浮世ではあるまいか。

82. 在ゲツチンゲン大學，パウム教授に宛てゝ。

[1882年 明治15年 (ウキンより 52歳)]

『……ランゲンベック教授の70歳の祝賀會は十分御化粧して上げたいと思ひます。實は1866年の戦争の時に奥軍負傷兵の爲めに随分盡力されたのですから其時既に大なる榮譽を捧ぐべきであつたのですが當時ヅムライヘル教授が大反對をしたので沙汰止みとなりましたが今日は其反對者も死んだ後ですから此際思ひ切つて大ひに粧飾して上げたいと思ひます。先生は往年石炭酸使用法の時に随分熱狂的な讚美者であつた様でしたが近頃はヨードフォルムに對して同様な熱狂的禮讃者になられたと聞きましたが少しく御考へ直しを願ひたいのであります。實は私の教室でヨードフォルム應用の爲めに軽度な精神的變化を起した1例がありました。以前にクロ、ホルム麻醉法應用の時に同様な病例がありました。それは確かにクロ、ホルムや又はヨードフォルムの腦神經中毒作用であつたと考へます。』

樂岡子！此時分は全部 Aseptic の時代になつてゐなかつた時代であつたらしく甲論乙駁丙論丁駁であつたらしい。然も之は1878年に Koch が Untersuchung über die Aetiologie der Wundkrankheiten の業績を公にしてから3ケ年を経過してゐる明治10年の頃の話であつてぼつぼつ細菌學の發芽期である。

83. 在ハンブルヒ市立病院，ドクトル，ラウエンスタインに宛てゝ。

[1882年 明治15年 (ウキンより 52歳)]

『……近頃流行と云ひませうか多くの同僚者達は手術不可能な癌腫患者に就ても有無を云はずに手術をしてゐる傾向ですが無暴な事と考へます。特に舌、直腸、頸部の癌腫などゝ云ふものは最初から手術不可能な病氣であると考へます。特に早期發生の患者は除外として其多くは既に蔓延し過ぎたものが多いのです。私の經驗によりますと特に十二指腸癌種には此種類が多い様です。私の多數の胃癌の材料に就て5ケ年來の研究によりますと此處にも彼處にも手術可能の病例が少くないのに驚いてゐる位です。然し何時も手術後再發しますのが多いのは困つてゐますが唯だ適當なる病例でさへあれば確かに癌腫の根治的手術が出来ると云ふ事

を證明されたのは10年以來の事ではありませんか！たとへ根治が出来ないとしても十二指腸癌腫の手術によりて少く其病苦を輕快さす事は他の藥劑の力よりは遙かに優つてゐると考へます！。特に十二指腸狹窄に對する手術によりて病人の病苦の重なる點が除かれるのは事實であります。……』

樂岡子！之はバウム教授が B. に癌腫の外科的手術の一般的價值を問合せたのに對する返事であらうと思ふ。そして今日の専門家から見ればどう考へるか知らないが癌腫手術に對する當時の立脚點を知る事が出来ると思ふ。

84. 在ウキン大學, デツテル教授に宛てゝ。

[1882年 明治15年 (ウキンより 52歳)]

註。ランゲンベック72歳にして退職後の後繼者として B. がベルリン大學外科教授として招聘の議があつたのに就て其内交渉に對する謝絶の手紙の一節である。

『……君の意見もよく荊妻にも話した上で君の厚意は大ひに感謝するが伯林大學への招聘は遂に謝絶して了ふた。それは決して 惡意ある譯ではない。種々の理由の爲めに伯林行きは全く思ひ切つた次第である。……』

樂岡子！當時師たる B. は其師なるランゲンベック教授からも又教授會一致の推選だから自分の後繼者になつてくれないか。ウキン大學よりは好條件をつける用意もある云々と手紙を直接 B. へ送つたのであつた。然るに B. は之に應じなかつた。其理由の一は25年以上も B. は既にウキン大學の外科御大として動かすべからざる且重要にして名譽ある位置に居り又奧太利亞だけでなく歐洲諸國にも既に其雷名は轟き傳つてゐたし、又特に B. の音樂趣味はウキンでなければとても満喫出来なかつたらうし、又多くの友人に圍まれながら豪華生活をやつてゐたのだからたとへ心中に 奧太利亞人の氣質は氣に入らなかつたとは云へ今更伯林移轉でもあるまいと考へたらしいと思はれる。

85. 在ウキン, ドクトル, ゲルズニーに宛てゝ。

[1882年 明治15年 (インテルラーケンより 52歳)]

註。B. は遂に病んだ！此時分には彼の脂肪心臟症狀が自覺的に著明になつて來たらしい。

『……拙者は今此地に靜養中だがウキンに居つた時より輕快したとは云へない！脈數44—48そして不正だ。然し幸にして夜はよく眠れるよ。……』

86. 在エルタグセン, トビュウスに宛てゝ。

[1883年 明治16年 (ウキンより 53歳)]

註。宛名の人は B. の知人にして何處かの大地主らしく其小供の醫學修業に就ての問合せに對する返事の一節である。

『……醫者になるのに重要な性質は何かと云へば此地の友人 ノートナー教授も「唯だ

善良なる人間が善良なる醫者になり得る」と云ふてゐますが拙者も頗る同感です。拙者は之に附け加へたい文句は「善良に教育する」と云ふ事です。貴下の御令息は確かにそれに適當してゐると考へます。……「如何にして醫學の智識を得るべきか？」との御尋ねに對しては拙者は獨逸國が一番好適と考へてゐます。そして先づ解剖學、化學、理學、生理學、動物學、植物學、修得の爲めに2ケ年は必要であります。大學に於ける自由な修業には別に監督とか強制とか云ふ事は無用であります。教授に教へられるのでなく實際は學生自身が自分自から教へて行くのが第一義だと思ひます。最善なる教師たるべき者は若い者が興味を持つ様に刺戟さへすればそれでよいものだと思ひます。……多く講義を聴いたからとて役に立つものではありません。唯だ各學期に於てある一點に精力を集中して修業の分裂せない様にせなければならぬと思ひます。多くのものを少量よりは寧ろ少なきものを多量に學ぶ方がよいと考へます。……又「何處の大學がよからうか」との問題に就て斷定する事は拙者には甚だ困難であると云ふのは拙者の如き年頃になると若い教授連の事は甚だ不案内でありますからです。ストラスブルヒ大學は新進的の學叢ですからよからうと思ひます。それからハイデルベルヒ大學も決して悪くはないと考へます。が初學者には伯林、ミュンヘン、ウルツブルヒ、ブレスラウ等と云ふ大きな大學はよろしくありませんし、又エナ、マルブルヒ、ニーセン等の小大學となると解剖材料等々が少な過ぎると考へます。……少なく共最初の3ケ年間は同一の大學に留つて勉強する事が必要と考へます。最後に伯林へ出て行くべきものだと思へます。……それから卒業試験が済めば兵役となりますからそれが終れば3ヶ月程ウキンへでも御出でになればなんとかして及ばず乍ら拙者が手ほどき位はして上げますし、ウキンには大病院もありますし又種々な實習科も殆んど外國人の爲めに設けられてあると云ふてもよい所です。パリー又はロンドンの醫學修業は現今では無益だと思ひます。それは彼處では最早得る處はなからうと思ひますのは醫學の點に就ては我獨逸人等は佛人や英人を追いついてゐるからであります。……貴下の御令息は安心して大學へ入校さして上げなさるがよからうと思ひます。然し例の學生組合に加入する事は禁止せないにしても私は少く共賛成は致しません。それは唯だ時間つぶしになるだけだと思ふからであります。……』

樂岡子！若い大學入學生に對する老ひたる B. の指導方針はその根本に於て今日も昔時も變らないと考へる。然し試験！試験又試験で苦しめられてゐる日本の小、中、大學の若い人達は氣の毒とも考へられる。學生は學問を壓搾する目的物ではなからうと考へる。

87. 在ゲツチンゲン大學、ケーニヒ教授に宛てゝ。

[1884年 明治17年 (ウキンより 54歳)]

『……結核と炎症との關係が論じられてからも其相互の關係に就いてはまだ確定してゐないではないか？今後10年も経つと此問題は如何に變つて來るだらうか？バチルスと病氣より生

する毒産物に就ての問題になるととても我々の生きてゐる間には解決出来まいと思ふ。……近頃 Koch が結核菌に就て云々してゐるがまだ確定論とはなつてゐない。拙者は此問題に就て深入りすればする程數々アクチノミコーゼ菌の退化した小球を鏡子に見る事が多い。だから Koch の所謂結核菌なるものは或はアクチノミコーゼの變形したものであるまいか？或は牧牛から人間へ来る種々の菌體であつて同一の病變を起すものではあるまいかとも考へてゐる。……』

樂岡子！Koch が結核菌を公にしたのは1882年即ち我朝の明治15年にして（今日を去る事、實に57年前に相當す）B. は細菌學者でないからアクチノミコーゼと結核菌とを同一にするのも無理はないにしても同じ歐洲の天地にあつて此問題に就て當時に於ける學者間の意見を知るのも面白いと思ふ。だからまた今後57年も経てば結核菌は何處へ行く？と云ひたくなる。

88. 在ハイデルベルヒ大學、チエルニー教授に宛てゝ。

〔1884年 明治17年（ウキンより 54歳）〕

『……拙者は近頃腎臟摘出を灼鐵鉤を用ひてやつて見たので其成績報告を送る……拙者は最早學問的生産力は盡きて了ふたらしい。それよりは文筆作業の方が楽しみになつてきた。だが自信と云ふものがなければ何事も出来ないのだがその自信力が最早盡きた様だ。……』

樂岡子！B. も老境に入つてきた！人生50, 70は古來稀なりと云ふ言葉がある。それは壽命の事であるが作業も年と共に衰退するのは普通である。だから若い人々は猛進すべきだよ！

89. 在ウキン、ビルケ男爵に宛てゝ。

〔1885年 明治18年（ウエネヂヒより 56歳）〕

註。ビルケ男爵と云ふのはB.と如何なる關係の人であつたか知らないが、奥國政府の教育制度に關係ある官吏であつたらしく奥國教育制度改良に就いてB.の意見を求めたに對しての意見書らしく恐ろしい長文であるが其中から必要な事を拔萃して書く事にした。此時B.は奥國貴族院の一員となつてゐた頃であつた。

『男爵閣下！私にとりましては實に光榮ある御尋ねであります。それに就いて本日一書を拜呈致します。御尋ねの我が奥國の中學及び大學の制度改革に就きましては私も決して興味がないのではありませんがそれに就きまして卑見を述べる事を寧ろ差控へたいと申したいのは私は此問題に就いての専門的教育家ではありませんからそれに就いての實際の經驗は持つてゐないからであります。特に私には男の子供がありませんので當奥國中學校教育制度に就ては全く無智でありますし、又私が獨逸の中學生であつた時代とは大ひに世態も違つてゐるからであります。然し私は嘗て Über Lehren und Lernen der med. Wissenschaft. と云ふ一文を公に

した時と今日とは時勢の變遷につれまして私の考察も多少變つて居りますが教育制度に就ての閣下の御意見には大ひに賛意を表する次第であります。』

『……博學多識たれと云ふ教育方針で育てられたとて理解のある人間が出来ませうか？ 私は否と答へたいのです。此積み込み主義の根本的誤信が漸次社會に浸潤してゐる様であります。蓋し博學多識と云ふ事は結局唯だ教へられた事に就いて記憶の多くを出来るだけ保存して失はないと云ふに過ぎません。之によりて有爲の人物を作る事は出来ないと思ひます。』

『……學校教育によりて人間に平等の智識を得させ平等の教養を植ゑ付けると云ふ事は無理であると思ひます。如何となれば人間と云ふものは最初から不平等に産み付けられてゐるからであります！ 自分自身を教育し自分自身を抑制しそして義務と責任の強い觀念と云ふものゝ核は因襲的にそして實行の上で世々代々家庭的に植ゑ付けられてゐるものでありますまいか？ 然るに學校で之を成るべく平等の人間にしようと云ふのは根本的に誤つては居りますまいか？ 獨逸國では凡ての大學生の7/8は善良なる家庭の人々でありまして残りの1/8は其他の家庭から入學してゐます。そして私が各方面からの聞く處によれば理想的な眞面目な精神と義務觀念とそして愛國心は獨逸大學に於ては尤も高調せられて居りますから將來大いに期待すべきものがあります事は全く塙國とは違つてゐます。そして獨逸國にあつて中學及び大學を卒業します者は地主とか商人とか又特に優秀な技能を持つて居ります者でありまして平均年額3—4000MR位な學資を出せない者にして大學に入學させようと云ふ考へを持つてゐる者は甚だ少ない様であります。時に或はこんな者もありまして一時的に法科或は文科とかに入學さす事もありますが暫時すると退學して再び田舎に歸したり又商人としてしまひます。又特に獨逸の貴族階級例へば普魯西亞國、バーテン國の皇太子なども大學生となつてゐます。しかも獨逸の皇太子は一時カツセルの中學生ともなつて平民的教育を受けられましたが若しもビスマルクが軍隊教育主義者でなかつたらもつともつと善かつたゞらうと思ふのです。こんな事を申しますのは獨逸國に於ける中學生大學生の狀態が全く我々の塙太利亞國と異つてゐると云ふ事を申上げたい爲めであります。』

『……獨逸に於ては中學生が學課の爲めに過勞されると云はれてもゐますが實際は決して然らず、活潑にそして健全な心身を持つて卒業して行きます。又獨逸大學は法科も醫科も試験は當塙國よりは遙かに嚴格であります。法科は3年、醫科は4年となつてゐて其學資は塙國よりは遙かに高値につきますのは講座料も殆んど倍額であります。だから卒業後醫者は軍醫團へ押かけて行くか或は田舎へか或は小都市へ行つて獨立してやつて行かうと考へてゐます。だから醫科を卒業して是等の道を歩いて獨立して行けないものは勿論其の後に於ても學究的の道程には上れない事になります。大學研究生として生活して行けない者は學究的學堂へは入れないのです。勿論貧乏な學生も少なくないのですが是等は補助金制度とが無料食卓制度などがありますから乞食學生とは些か其の趣きを異にしてゐます。そしてたとへ學生時代には

貧乏生活をしてゐても臆て何處かへ就職出來ると云ふ希望は十分に抱いて居ります。』

『……1848年に墺國は此の獨逸の中學大學制度を採用しましたが中々此の國の因襲的貴族的習俗は一朝にしては變りません。それから學生の身分を調査しますと貴族的なものは ヂェスウキト 宗教團から教育されて居る人か又は商人世界の人々で、しかも殆んど猶太民族であります。そして當墺國の大學生は多くは貧乏學生か又は「のら」學生が大多數であります。それは大學を卒業すると云ふ事は其の一生を一六勝負にかける爲めであつて決して人間らしくならないのであります。だから何等考へもなく且無恥にして責任感などは少しも持つてゐない人々であります。だから多數の學生は中學から大學そして醫業へと乞食して歩いてゐると云ひたいのです。それ故に精神的名譽とか醇化とか團結とか秩序とか云ふものは皆無であります。勿論其の中には理想的な小分子 又は優秀にして且勉勵な研究者とか學者がないのではありません。そして少數な優秀な人間を引きまとめてゐる爲めに 獨逸學派から敬意を表せられてゐると云ふ事は心竊かに私の矜と考へてゐる事であります。然るに墺國政府は是等の大群に對して如何なる考へを持つてゐるのでせう。是等の學生に對して 獨逸國に於けるが如き學生の自由 (Studenten Freiheit) などとはとても適用出來ないのですが左りとて嚴格なる學期試驗制度によりて之を矯正しようとするのも無益であります。獨逸の自然科學會に於ける ヘルムホルツ とか ウキルヒヨウ とか云ふ大偉材 又は我々の國の ノートナーゲル の如き 天才などは皆柏林大學の軍醫學校出身者なのです。だから墺國に於てもまづ軍隊諸制度を改正してやらなければならないと考へます。墺國の大學生は學生として 少くも責任感がないのですが學生だけではなく教授の職にあるものも亦再教育すべきものだと思つてゐます。』

『……ビスマルクが嘗つて云ふた言葉があります。即ち「獨逸國民の天才的な人間は自分自身を街頭で發見して勝手に活動してゐるが國家は官吏と醫者と僧侶とを要求する。」』

『……それは唯だ唯一の政府の下に有力なる大臣にして將來永續して其の職にあり得るものであつて青年教育に興味を有する人物でなければ出來ない仕事であります。』

『……本當の文部大臣たるものは獨逸にあつては百年後の事も考へてゐて政治の變化などによりて左右されるべきものではない事になつてゐます。』

『……然るに今日若し1人でも有爲の大臣があつたとしたら忽ち追ひ出されて次に任命された大臣も亦政治的又國家的事情から免職されて了ひます。それで今日ではあの マルチンルーテル の如くに Hier stehe ich, Gott helfe mir, ich kann nicht anders! と叫び得る文部大臣があるでせうか??』

『……私の此の手紙の書き方が少々脱線しましたのを御容赦を願ひます。が我々の醫科大學生の爲めには無益ではないと思ひますので 政治的の注意をもう少し云はしてもらひます。實は此地の一般の新聞に2,000人の醫學生の爲めには 十分な設備が缺けてゐると叫んで居て之を倍にすべしとか3倍にすべしとか云ふてゐます。それには澤山な金が入用となりますがさて

考へて見ますと此の多額な金員は何處から得られませうか？ さうなると第1に此の多數の醫學學生は無錢遊興者同様でありますか又は 富裕な ノホホン 生活をしてゐますか或は乞食生活をしてゐますものだけになつて グラツ市大學とか インスブルツク市大學にはとても生きて居られない者共が ウキン大學へ流れ込んで來ませう。第2に ウキン醫科大學生の半數は ウンガルンの猶太民族である事ですから ウンガルン政廳の大臣たるものは 同地にもつと教室の數を増加し他日 ウンガルンで醫者になつて行かうと思ふものは少なくとも3ヶ年は ウンガルンの大學に在學させなければならぬと云ふ法令を設けるべきであると思ひます。さうすると ウキン大學の醫學生の數が半減すると思ひます。従つて教室の増加の必要はなくなると考へます。』

『……たとへウキンが塙國の一大都市と云はれても其の國民はますます増加しつゝある納税の爲めに奴僕同様に働かねばならぬ國土と國民となつてゐるではありませんか！ だから少しは ウンガルンの爲めにも世話を焼いてやらねばならないかと思ひます。……私の饒舌を御許し下さい。他日を期してまた私の意見を述べたいと思ひます……。』

樂岡子！ 驚くべき長文の手紙である。F. v. Pirquet は塙國の議會の一代議士であつたが B. が書簡にてこれだけ醫學教育に就いて又政治上に氣焰を吐いた手紙は 發見出來ないが之は多分 P. が醫育上の事に就いて B. の意見を求めたのを機會に B. は思ふ存分其の平常の不平と不滿を書いたのであらうと考へる。然し脚下照顧！ 脚下照顧！ 我日本はどふだらう？

90. 在フランクフルト、ドクトル、アイセル (Dr. Eisel) に宛てゝ。

[1885年 明治18年 (ウキンより 56歳)]

『……拙者の頭髮は既に半白となりましたが57歳の老輩としては然るべきであります。そして貴下も早や50歳となられたと聞いて驚きました。歲月の流るゝは早いものでありますが拙者は拙者獨りだけが老いた様な氣持がするのです。……拙者の學問的創造も今日では最早昔語りとなつたと云ふものです。……色々人生苦がある様ですがそれは貴下令閥の援助によりて打ち勝つて行けると思ひます。だから貴下も十分人生の楽しみを 楽しむがよいと思ひます。拙者としても回顧しますれば私は名譽欲も十分に満喫しましたし 又満喫し盡したと云ひたいです。それ故に此上最早學問にも業務にも興味が薄くなつてきた事が情けないと思ふのです。それは我々の學問も 能力の甚だ不完全にして 無力な事を知つて如何にも慨歎に堪へないし特に拙者の創造力も生産力の減退した事に 思ひを致しますと無限の悲哀を感じるのです。それは拙者に救助を求めにくる外國の患者の3/4は不治の病であるのを考へると實に情けなくなりますしそれを他人はその事を名譽な事だ、幸福な事だと云つてくれますが實は拙者にとりては悲哀の感に堪へないのであります。加之世界諸國から留學してゐる 數百人の醫學生を教へてゐると云ふ事などは考へて見ると馬鹿な話ですよ！ 結局拙者は無用の老人となりました。そ

して今日では優秀の助手達が拙者より以上に手術をやつてのける事が出来るやうになりました。それには私は些か矜とすべきです。然し矜としたとてそれが何の利益になりませう！ ……其上に評議員會だとか教授會とか委員會だとか何ぢや彼ぢやと 無益の集會があります。一體それが拙者に何の利益があるのでせう？ 時々拙者の家族の者が拙者に「結局何が我等の爲めに遺つてゐますか」と問ひますが考へて見ると拙者の家庭には 6 人の子供の内 3 人だけが遺つてゐると云ふだけです。……それから近頃拙者は好きな音楽も餘りやらない事になりました。凡てが塵となつて飛散してしまひます。以前は拙者の家庭はウキンに於ける音楽堂の様でありまして何時も 有名なる音楽家も訪れてきましたが今日では既に過去の夢となつてしまひました。……一般に此世と云ふものは家庭に子供が出来ると兩親の影が漸次薄くなるものです。それは凡ての事が子供を中心として動かされる様になりましてそれは唯だ子供等を苦しめずに生活さそうとの考へから来るものです。勿論拙者の娘共は決して贅澤に養育したのではありません。子供への愛情に引きずられ兎角精神的、藝術的の雰囲気の中に大きくなつてきました。……考へて見ますと家長と云ふものは家族の爲めの金もうけの機械に過ぎないと云ひたいのです。……拙者は春期には 3 週間の休暇を得てアバチャ、又は伊太利亞などへ旅行する習慣となつてゐるのです（伊太利亞は拙者の第二の故郷の感がある國です）。……だから拙者は獨逸へ行く機會が少ないのです。それから醫者の商議に招かれるとか、手術の爲めとかで去年はアテーンへもコンスタンチノーブエルへもペーテルスブルヒへもパリーへもリサボン、ネアペル等々へも度々行つた事がありました。それで旅の疲れもあるので獨逸的とか英吉利的とか又は萬國的とか云ふ醫學會へ列席する機會も少なく、ために獨逸の同僚仲間には追々疎遠になりますのです。實は拙者は學會などに出席して囂々たる話を聞くよりは寧ろ心身の休息が求めたい性質です。』

『……1890年には斷然教授の教職から引退する心算ですが此時は拙者は丁度61歳になります。が61歳の老人に何の楽しみが出来るものでせうか！ 全く無用の生活體と云ふものです。許して下さい。兎角老人になると饒舌になるものです。……』

樂岡子！ 功成名遂げると人間は兎角ス様になるものか、素質か、環境か？ 兎に角に B. はウキルヒヨウとは全く性格の異つた人間であつたらしい。

91. 在カルルスルウ市、リュブケ教授に宛てゝ。

[1885年 明治18年 (ウキンより 56歳)]

『……君は健康上から仕事を制限せなければならぬと云ふ事を慨歎してゐる様だが拙者は健康でありながら以前の様に仕事の出来ないのを慨歎してゐる次第である。……拙者は戦闘に疲れ果てたよ。蓋し仕事に猛進すると云ふ事は一種の戦闘ではないか！ ……拙者の従事する醫學と醫業にはあきあきしたよ。それは拙者と同じ様に仕事の出来る弟子を養成したからだ。

否拙者と同様ではなく寧ろ拙者よりはより以上の能力ある弟子が出来たのだ。然し拙者は道徳上から仕方なしに現在の仕事を継続しなければならないと云ふのは妻子の爲めに後日の事を考へてゐるからだ。拙者の今日の氣持は實に之なのだ。……』

樂岡子！老ひたる人間 B. は正に此如くであつた。56歳ではまだまだ老ひばれとは云はれない。特に西洋にあつては然るべきであるのに B. は既に疲れ切つてゐたらしい。

92. 在ウキン、フォン、ビルケ氏に宛てゝ。

[1886年 明治19年 (ウキンより 57歳)]

註。此手紙はエスマルヒが卒先して獨逸の古典中學教程の改革 (Unmanialgymnagium) を叫んで中學校に於ける羅甸希臘語の廢止論が起つた時に P. に送つたものであるらしい。

『……閣下！羅甸語とか希臘語とか云ふ古典語學は最早學界の國際的通用ではありませんが今日でも國際的的關係から全廢する事は中々困難であると考へます。例令 Mikroben, Mikroccocen, Bacterien, Stroptococcen 等々の術語は皆獨逸では希臘語に獨逸語の後尾をつけ佛蘭西では佛蘭西語の後尾をつけてゐますし又 Musculus sternocleido-mastoideus, Cartilago arytaenoides 等々の解剖學の名稱なども讀者には何の意味か解らないがその儘通用させてゐます。古來幾多の學者が是等の術語を獨逸語化しようと試みましたが駄目でありました。だから私は羅甸語、希臘語教授全廢は不可能であると考へてゐますが之をもつと減少して羅甸語なればチエザー、チチエロの演説文位は讀める様に、そして希臘語なればクセノホン、ホメーア位は解る位であればよいと思ひます。少く共醫學を學ぶ者には此程度でよろしいと考へます。……』

樂岡子！漢學減少、漢字全廢、日ク制限、日ク羅馬字論、日ク假名文字論等々東も西も同じである。特に日本の醫學術語にも中々無理がある。日本語、日本字は何處へ行くのだ？

93. 在ウキン大學、ドクトル、ゲルズニーに宛てゝ。

[1886年 明治19年 (ウキンより 57歳)]

『……我々の敬愛する Arlt 老人が重症に陥つてゐるのだ。丁度8日前に不意に左側の膝膕動脈トロンボーズを起したらしい。それは最初は分枝部のエンボリーが原因だつた。そして足部の貧血、それから全下肢の血行停止だ。そして皮膚は冷たいし大理石色を呈してゐるし甚だしく過敏になつてゐる。それから脚の内側部には淋巴炎を起してゐる。然も脈搏は充實であつて正常だし舌も濕疹してゐないし無熱だし又聽診上にも心臓には異常はないし又何處にも動脈瘤は發見出来ないのだがエンボリーの原因が更らに解らない。脈搏の確かなのが嬉しいが狂氣の様に足部の疼痛を訴へるのは側目にも戰慄する程だ。此際麻醉藥の投與は怖ろしいが今日は見るに見兼ねて斷然決心して 3% モヒ 1 筒を注射してやつた。すると彼は「とうとう其處まで來たか！仕方がないよ！」と云ふた。然し之が爲めに疼痛は緩和されたよ。そして1ヶ月來 A. は全く不眠症であつたが拙者がモヒの注射をしたのは丁度夕刻であつた。そして其作用が現はれて來る迄病床に居つたが A. は曰くだ「君等は終日働いたのだから」

ら此上俺が君等に苦痛を與へるに忍びない。歸つてくれよ」と云ふた。實に驚くべき勇氣のある人間ではないか！そして D. とか W. とか J. とか S. とか云ふ同僚は居るが何れも多用な身であつたり又疲れたりしてゐるので一定の主任醫がないと云ふものだ。そして最終の問題は「切斷手術？」だがそれは拙者が決定せなければならない役なのだ。思ふても恐ろしい非人間の仕事だ。豫後の事を考へるととてもそれまで考へ付けられないのだ。拙者の是迄の経験によるとたとへ一度切斷しても又切斷又切斷ぢや。トロンボーセは平氣で進行するのが普通なのだ。W. は拙者と同様な外科的技能は有してゐるが A. は此老人 ビルロート に慘酷な切斷手術をしてくれいと云ふに定まつてゐる。たとへ此老人 ビルロート が此際重い眼病に罹つてゐても老人 A. が矢張拙者に切斷してくれいと云ふに定まつてゐる。……』

樂岡子！醫者は友人、親戚、家族の者を治療出来ないと言ふのは昔時からの戒めである。

B. の如き大家でも無名の町醫でも同じ心境であるまいか！

94. 在 ウキン 大學, デツテル 教授に宛てゝ。

[1886年 明治19年 (サンギルケンより 57歳)]

註。B. は遂ひに A. 老人に左足の切斷手術を行ふたらしい。それより1ヶ月後の手紙である。

『……A. 老人の病氣の経過に就て 同情の手紙を戴いた事に對して感謝する！拙者は少くとも A. 老人のために全力を盡した事だけでも老人に對する責任と義務を遂行した積りだ。A. 老人は實に現代の眼科學の 大家中の大家なのだ。そして人間としては稀に見る偉大なる人格者なのだ！そして今後 隻脚の一老人となつても 益々多幸多福ならん事を 祈つてゐる次第である。拙者は急いで靜養に出掛けなければならない。疲れ果てたよ！そして美しい大自然に接して少しでも疲れた心身の轉換を試みざるを得ない。……』

95. 在 ウキン, ブラーム 教授に宛てゝ。

[1886年 明治19年 (パリーより 57歳)]

註。此時 B. は伊太利亞、佛蘭西、英吉利へと家族と共に慰安の旅行を企てたらしい。

『……拙者は之迄散々 ウキン 大學の學生の怠慢振りを罵倒したが拙者は教授として職責上大に勉強する心算だ。……伊太利, ロンドン, パリー の自然を満喫したから之から再び學堂の乾燥無味な教職に飛び込む心算である。……』

96. 在 ウルツブルヒ 大學, リンドフライシュ 教授に宛てゝ。

[1887年 明治20年 (ウキンより 58歳)]

『……拙者の病氣は漸次輕快して來た。だが睡眠は甚だ悪い。そして夜間強い咳嗽發作がある。今後どうなるのか解らない。肥胖病との争鬭だ。腹部に脂肪沈着が多過ぎるし、心臓にも脂肪沈着が甚だしいらしいし、そして其上に膽石と腎石の傾向があるらしいが發汗療法が拙者の爲めには全身の呼吸を助進せしむる様に考へる。あの Oertel の脱脂療法も其儘では拙者には應用出来ない。……兎角萬事控へ目に控へ目にと心掛けてゐる。……』

近藤教授就任式記事

(昭和14年7月8日、於京都帝國大學醫學部外科・整形外科講堂)

副手 柏 誠治、渡邊三喜男 記

開式午後4時25分。

萩原教授ノ近藤教授紹介(登壇)

『此度本學整形外科學教室主任教授ニ就任セラレタ近藤教授ヲ御紹介イタシマス。』

萩原教授ノ近藤教授略歴紹介(登壇)

『續キマシテ近藤教授ノ略歴ヲ御紹介シマス。近藤教授ハ近藤銳矢(エイシ)ト申サレマス。教授ハ静岡縣岩田郡井通村森本1224番地ニテ明治33年5月16日ニ生レ、第五高等學校ヲ經テ大正15年3月京都帝國大學醫學部ヲ卒業シ、同年4月副手トシテ外科學教室勤務ヲ命ゼラレ、同年5月12日醫師免許證ヲ下附サレ、同年7月助手トシテ整形外科學教室ニ勤務ヲ命ゼラレ、昭和4年1月9日依願免官トナリ、同月10日財團法人田附興風會北野病院整形外科々長ヲ囑託サレ、同月11日京都帝國大學醫學部講師ヲ囑託セラレ、昭和7年5月ヨリ同年6月迄同病院ニ於テ臨時外科々長ヲ囑託サレマシタ。昭和11年12月5日京都帝國大學ニ論文ヲ提出シ、醫學博士ノ學位ヲ授與サレマシタ。昭和14年6月30日願ニ依リ同病院整形外科々長ノ囑託ヲ解カレ、同日京都帝國大學教授ニ任ゼラレ高等官五等ニ敍セラレ、整形外科學講座擔任ヲ命ゼラレタノデアリマス。

以上ヲ以ツテ近藤教授ノ略歴紹介ヲ終リマス。』

松本信一醫學部長挨拶(登壇)

『伊藤前教授御退官以來專任教授ヲ持タナカツタ整形外科學教室ガ、今度近藤教授ヲ迎ヘマシタ事ハ、各位ハモトヨリ學部トシテモ喜ビニ耐ヘマセン。我ガ京都帝國大學建設責任ノ一部ヲ持タサレテキル醫學部ノ責任ハ重イノデアリマス。又京都帝國大學ガ如何ナル進路ヲ取ルカト言フ時ニ、教授ヲ迎ヘル事等ハ重大ナ事デ、唯今近藤教授ヲ迎ヘル事ハ、私トシテ多大ノ希望ト信頼ヲ置クモノデアリマス。同教授ニ大學ノ使命達成ニ充分ノ抱負ヲ盡サレン事、及ビ教職員ハ協力シ同教授ノ教授トシテノ職責ヲ全ウセラレル様努力セラレン事ヲ希望シテ止ミマセン。

今日同教授ヲオ迎ヘスルニ當リ、學部ヲ代表シ同教授ニ敬意ヲ表シ、同教室ノ發展ヲ祈リマス。之ヲ以ツテ私ノ挨拶トイタシマス。』

盛新之助醫院長挨拶(登壇)

『此ノ度近藤博士ガ我ガ京大ノ教授ニ就任サレマシタ事ハ我々ガ心カラ御歡迎スル次第デス。永ラク整形外科ニ教授ガ缺員ニナツテキタ所、カハル新進氣鋭ノ良教授ヲ得ル事ハ附屬醫院ノ大キナ發展ノカヲ得タ次第デ、心カラ喜ビニ耐ヘマセン。之デ附屬醫院ノ方ハ全部教授

が揃ツタ次第デ、之カラ出來ル丈ケ努力シ、醫院本來ノ使命達成ニ邁進シ度イト思ヒマス。

近藤教授ニハ我々ノ意ヲ汲マレテ一意専心教授ノ任ヲ盡サレン事ヲ切望シマス。』

伊藤前教授挨拶(登壇)

『私が昨年5月退官シテ以來早ヤ1年2ヶ月ヲ經過シマシタガ、私ハツラツラ考ヘマスノニ、此ノ非常時ノ日本ニ今醫學部長ガ言ハレタ様ニ大學ノ使命ノ一部ヲナス醫學部ノ使命ハ重大デアリ、特ニ整形外科ノ使命ハ戰時ト離スベカラザル重大ナ使命ヲ有スルモノデアル。大學ガ直接傷病兵ヲ取扱ツテキナイニシテモソノ使命ハ重大デアル。學部長ノ言ハレタ様ニ、慎重ニ慎重ヲ重ネラレテ決メラレタ近藤教授ハ指導及ビ教授ニ遺漏ナキ事ト思ハレマス。

私ノ教官時代私ニハ絶エズ不満ガアリマシタ。私ハ明治43年以來伊藤、猪子兩先生ニ就テ大正8年迄一般外科學ヲヤツタ。助教授ニナリ、ソレカラ直チニ整形外科學教室ヘ教授トナリ就任シタ。ソノ爲ニ外國ヘ行ツテモ、トモスレバ一般外科學ノ方ヘ心ガ向キ、純整形外科ヨリモ一般外科ヘ興味ガアリ申譯ナイ次第デアル。ソレニ比シ近藤教授ハ卒業後間モナク整形外科ニハ入ラレ、純整形外科ニ非常ニ興味ヲ持ツテキラレル。此ノ事ハ大切ナ事デ興味ガ無イト仕事ハ出來ナイモノデアル。此ノ意味デ私ハ未ダ若イ近藤教授ニ大イニ期待ヲ持ツテキル。近藤教授ハ又非常ニ勤勉デ且頭ガ良イト言フ事ハ衆知ノ事デアル。必ズヤ將來立派ナ仕事ヲサレルニ相違ナイ。ドウカ教室員ノ方モ互ニ相扶ケ教室ノ隆盛ニナラン事ヲ祈リマス。一言祝辭ニ代ヘ挨拶致シマス。』

有志教授(星野教授)挨拶(登壇)

『我々がオ互ニ最モ關心ヲ持ツテ居リ、ソノ誇ヲ我々ノ誇トシ、ソノ興隆衰滅ヲ以ツテ我々ノ興隆衰滅トスル我ガ京都市大醫學部ガ、今度永ラク缺員デアツタ整形外科ノ主任教授ヲ新シク迎ヘラレル此ノ式ニ當リ、有志ノ者トシテ専門學科以外ノ職員トシテ挨拶ヲ述べサセテ頂ク事ヲ、私ノ光榮トスルモノデアリマス。

願マスト丁度2年前、此ノ日支聖戰ノ勃發ト殆ンド時ヲ一ニシテ、學園未曾有ノ所謂京大事件ガ勃發シマシタ。次第ニ波瀾ガ擴大シ終ニ醫學部殊ニ臨床學科ヲ襲ヒ、ソノ餘波ハ餘波ヲ呼ビ、臨床學科ノ多數ガ動搖シタ事ハ申シ上グル必要ノ無イ程我々ノ記憶ニ生々ト殘ツテキル所デアリマス。爾來當局ハ銳意其ノ再建ニ努メ、着々ト改組ガ行ハレマシタ。ソシテ今日整形ノ主任教授ヲ迎ヘルニ當リ、コハニ臨床學科ハ全部陣容ヲ新ニシマシタ。奇シクモ昨日聖戰二周年ノ興亞記念日ヲ迎ヘ、本日此ノ講堂ニ於テ整形外科學教室主任教授ノ就任式、即チ最後ノ陣營ヲ備ヘル式ガ行ハレル事トナリマシタ事ハ頗ル意義深イモノト思ヒマス。

私ガ承ハリマス所ニ依リマス、京大外科及ビ整形外科ハ、他ノ學部ニ見ラレヌ特長ガアルソウデス。ソレハ外科、整形外科ガ打ツテ一丸トナリ、共ニ研究シ共ニ相携ヘテ進ンデ行ク事ガ京大外科、整形外科ノ麗ハシイツノ特長デアルト言ハレマス。外科學講座デハ昨年新進ノ青柳教授ヲ、本年ハ萩原教授ヲオ迎ヘシ、外科ト最モ關係ノ深い整形外科ノ主任教授ヲ迎ヘ、

之ニ依リ京大外科、整形外科ニヨツテ成シテキル學風ノ鼎ガ確實ナ基礎ノ上ニ磐石ノ如ク立テラレタト存ジ私ハ祝福スル次第デアリマス。之ニ依リ今後コノ三ツノ若イ、將來ニ富ム柱石ガコノ講堂ヲ中心トシテ、學界ヲ風靡スル日ガ今日カラ始マル事ヲ慶賀スルト共ニ、與望ヲ擔ヒ就任サレタル新近藤教授ノ首途ヲ祝福シ、御健康ナラン事ヲ祈リマス。』

外科學教室主任萩原教授挨拶(登壇)

『私ハ外科學教室主任トシテ、同時ニ外科學教室員一同ニ代リ一言御挨拶ヲ申シ上ゲマス。先年本學ノ外科學、整形外科學教室ノ三教授ガ殆ンド時ヲ同ジクシテ御退官ニナリ、昨年青柳教授ガ、又本年私が教授ニナリマシタガ、我々青柳教授ニシテモ、私ニシテモ、如何ニスレバ此ノ重責ヲ果ス事ガ出來ルカト日夜頭ヲ悩マシテキマス。此ノ時新進氣鋭ノ近藤教授ヲオ迎ヘシタ事ハ、青柳教授、私ハ申ス迄モナク、教室員一同滿腔ノ喜ビヲ感ズルモノデアリマス。特ニ永ク空席デアリマシタ整形外科ノ教室員ハ如何ニ喜バシキ事カト心カラオ察シ致シマス。今迄重任ヲ負ハサレテキマシタ私ニシテモ、整形外科學教室ハ教授ガ空席デアツタガ、練達ノ助教授アリ教室員アリ、甚シイ缺陷ヲ感ジタ事ハアリマセンガ、唯鼎ノ脚ガ短イ様デ何トナク具合ガ悪イ様ニ感ジマシタ。』

近藤教授ハ永年本學ニアリ、又本學ト密接ナ關係ニアル北野病院ニ在ラレ、本學ニ居ラレタト同様ノ狀態デ永年整形外科學ヲ専門ニ積マレタノデアリマスカラ、今後如何ニ立派ナ整形外科學教室ヲ築カレルカハ、諸先生ノ言ハレタ如ク何等懸念スル所ハナイノデアリマス。唯我々青柳教授モ、此ノ際就任後日尙淺ク、整形外科ノ主任トシテ近藤教授ヲ迎ヘ、近藤教授ノ御努力アツテ始メテ我々モ努力ノ仕甲斐ガアルト思ヒマス。

尙近藤教授ニ於カレマシテモ、外科學及ビ整形外科學教室ノ歴史ト傳統ヲ考ヘラレテ、整形外科學及ビ外科學教室、惹イテハ醫學部ノ爲メ一臂ノ力ヲ致サレン事ヲ祈リマス。

御挨拶ヲ申シ上ゲ、又同時ニ近藤教授ニオ願ヒシテ、私ノ挨拶ヲ終リ度イト思ヒマス。』

整形外科學教室員(濱西講師)挨拶(登壇)(整形外科學教室員一同起立)

『整形外科學教室員ニ代リ御挨拶申シマス。

與望ヲ擔ツテ御來任ニナツタ近藤教授ニ我々ノ心カラノ御喜ビヲ申シ上ゲマス。誠ニ司長ヲ得テ朗カニ仕事ニ當ル事ハ嬉シイ事デ一同喜ンデキマス。尙將來御指導御鞭撻ヲオ願ヒ致シマス。

次ニ私一人トシテ近藤教授及ビ學内諸教授ニ申シ上ゲ度イ。(整形外科學教室員着席)

此度ノ事變ニ整形外科學ト言フモノハ、働き、ソノ務、從ツテソノ功績ガ多少共世間ニ認メラレタ様デス。ソレハ之迄ノ戰傷者ノ義手義足デアリマス。戰傷者ガソノ機能ヲ得テ再ビ戰ニ又産業方面ニ働く事ガ出來ルト言フノデ、本人モ又満足、社會モ又驚嘆ノ眼ヲ腫ツテキマス。之ハ整形外科學ノ一方面ニ過ギナイ。恐ラク新聞ニ傳ヘラレナイ事ニ、整形外科學ノ知識ガ澤山貢獻シテキルト思フ。從ツテ此ノ期間ニ整形外科學ニ於テハ貴重ナ無數ノ經驗カラ、大

イニ進歩スルモノデアリ又事實シテキルト思フ。整形外科學ノ務ハ事變中ノミデハナク、ソノ後數年、十數年ニ亙リ戰傷者ノ後仕ホヲセナケレバナラナイ。

又整形外科學ノ取扱フ患者ハ經過ガ永ク、處置ノ適否、ソノ效果ハ早クモ1、2年乃至數年ヲ經ナケレバ判ラナイ。他ノ科ノ如ク數日ノ經過デハ判ラナイ。故ニ相當ノ經驗者ヲ作ラウト思ヘバ半年ヤ1年デハ作ラレナイ、相當永イ年限ヲ要スルノdeal。

又他方一口ニ整形外科學ト言フガソノ内容ハ極メテ廣イ。先天性ノ畸形カラ出來タ學カモ知レヌガ、戰傷者、骨折、脱臼、脊髓麻痺、強直、攣縮夫々ノ方面ノ特殊療法ヲセネバナラス。苟モ大學ノ一ツノ教室deal限リ夫々ノ方面ニ1人ヤ2人ハ熟練シタ研究者ガナケレバナラス。ソレガアツテ治療シ、後進ヲ誘導セネバナラス。所ガ誠ニ不幸ニシテ志望者ガ誠ニ少イ。尤モ此ノ度ノ事變ノ應召者ガアルニシテモ誠ニ少イ。漸ク其ノ日其ノ日ノ業務ヲ果シカネテキル次第deal。丁度30年前ニ整形外科學教室ガ出來タ状態ニアリ、コノマ、デ繼續スレバ前古未曾有ノ時局ニ際シテ、國家ガ最モ必要トスル整形外科學教室員ヲ送り出ス事ハ出來ナイ状態deal。之ハ誠ニ國家ニ相濟マヌ事ニナリハセヌカト思フ。此ノ難局ニ立タレタル近藤教授ニアツテハ、大キナ決心ト充分ナ御計畫ガアラウト思フガ、何トカー一段ト御奮勵ヲ希望スルモdeal。

此ノ常備員ガ極メテ少イト言フ事ハ前ノ機會ニ述ベタノデ、恐ラク心アル教授諸先生ハ何カ御理解ノ事トハ思ヒマスガ、外科教室ノ萩原・青柳兩教授カラモ御援助アリ、學内ノ諸教授モ「マアエ、ヂヤナイカ」ト言フ事ニナラズ學内ガーツニナツテ醫學奉國ト言フ點ヨリ、即チ大キナ了見カラ、教室附合、體面等ト考ヘラレズ、何卒國家ガ今緊要トスル整形外科學教室ヲ盛り立テルベク御協力ヲお願いシマス。整形外科學教室ノ新シイ發展ノ日ニ、近藤教授ノ發奮ヲ請願ヒ、兩外科教授、學内諸教授ノ御協力ヲお願いシマス。

私一個トシテハ何分古老、豫テカラお願いシテキタ辭表ハ御就任後御處分ヲ願ヒマス。』

近藤教授挨拶(定席ヨリ降壇、來賓席ニ向ハレテ)

『今般不肖近藤銳矢ガ、計ラズモ京都帝國大學教授ヲ拜命シ、本日就任式ガ舉行セラルハニ當リマシテハ、諸先生、諸先輩並ビニ多數各位ノ御臨場ヲ忝ウシ、且御鄭重ナル數々ノ御言葉ヲ賜ハリマシテ、寔ニ身ニ餘ル光榮ニ感激措ク能ハザルモノガゴザイマス。コハ、ニ慎ミテ御禮ヲ申上ゲマス。』

私ハ永ラク北野病院ニ職ヲ奉ジ、從ツテ研究ノ第一線ヨリ離脱致シテ居リマシタ所ヘ、此ノ度計ラズモ、眞ニ計ラズモ此ノ重大ナル附託ヲ受クルコト、相成リ、生來愚鈍ノ身ヲ顧ミテハ、如何ニシテ此ノ重責ニ當ランカト日夜心ヲ勞シテ居ル次第デアリマス。併シナガラ一旦心ヲ決シテ受ケ致シマシタカラニハ、假令前途ニ如何ナル荊棘ノ道ガ横ハツテオリマセウトモ、之ヲ抑シ分ケ斬リ開イテ進ムダケノ覺悟ト勇氣ト忍耐力トヲ用意致シテ居ル積リデゴザイマス。諸先生、諸先輩、並ビニ同僚各位ニオカセラレマシテハ、實ニ近藤一個ノ爲トハ申

サズ、我ガ京大整形外科學教室ノ爲ニ、何卒御懇情ヲ以ツテ御支援御鞭撻ヲ賜ランコトヲ御願ヒ申上グル次第デゴザイマス。

(再ビ登壇、整形外科學教室員一同ニ向ハレテ)

扱テ我ガ整形外科學教室ニ於テハ、支那事變勃發以來、教室ノ中堅トシテ熱心ニ活躍シテ居リマシタ所ノ專屬教室員ノ大部分ガ應召シマシテ、現在殘ツテキル所ノ專屬教室員ハ僅ニ兩3名ニ過ギズ、從ツテ此ノ人々ヲ中心トシテ活動サレテキル現教室員諸君ノ御苦勞ノ程ハ洵ニ察スルニ餘リアルモノガアリマス。然シ乍ラ斯ル狀態ハ決シテ我ガ教室ノミニ限ラレタ譯デハナクテ、他ノ大學ニ於テモ、又現在我ガ日本ノ各層各方面ヲ通ジテ齊シク人手ノ不足ヲ託ツテキル狀態デアリマシテ、今次事變ガ未曾有ノ大規模ナモノデアリ、且雄大ナル意圖ノ下ニ遂行サレテキル事ニ想到シマスナラバ、我々内地ノ持場ヲ守ツテキル者モ戰場ニアル人々ト同様ナ氣持ヲ持ツテ困苦艱難ニ耐ヘ、少數ノ人數ヲ以ツテ舉ゲ得ル最大ノ能率ヲ發揮シテ以ツテ使命ノ達成ニ努力セネバナラスト信ズル者デアリマス。殊ニ今次聖戰ノ結果ト時代ノ要求トハ我々整形外學科専門家ノ活動範圍ヲ著シク擴大シツ、アツテ、從ツテ之ニ携ハル者ニ對シ格段ノ努力ガ要望セラレテキルノデアリマス。斯ル重大ナル時期ニ極メテ少數ノ教室員ヲ以ツテ研究ニ將タ診療ニ從事スル事ハ確ニ難事ニハ違ヒアリマセン。然シ乍ラ諸君、醫局員、研究室員ハ勿論、技術員、看護婦モ教室全員協力一致、打ツテ一丸トナリ、各々持場々々ヲ守ツテ教室ノ發展ノ爲ニ邁進シテ頂キタイト望ンデ止マヌモノデアリマス。殊ニ整形外科ノ仕事ハ、他ノ科ニ比較シテ肉體ヲ勞スル事ガ非常ニ多イノデアリマス。ソレデアルカラシテ、教室員諸君ニ於カレテハ健康不振ノ爲、可惜大望ヲ中途挫折スル事ノ無イ様ニ平素ヨリ自愛アラン事ヲ望ミマス。

最後ニ我ガ外科學、整形外科學教室ハ從來ニシテノ如ク常ニ相協力一致シ、我々ノ先輩ハ不斷ノ努力ヲ以ツテ輝カシイ歴史ヲ作ツテ來ラレタノデアリマシテ、此ノ事ハ先ノオ言葉ノ如ク全ク他ニ類例ヲ見ザル所デアリマス。冀クハ、此ノ美シキ傳統ノ長所ヲバ護リ育テ、兩教室互ニ協力和合シ、我々モ先輩ニ劣ラヌ立派ナ歴史ヲ殘シテ行キ度イモノト念願シテ止マヌモノデアリマス。——之ヲ以ツテ私ノ挨拶ノ言葉ト致シマス。』

閉式 5時30分

式後參會者一同打チ連レテ直チニ樂友會館ニ參集シ、同教授歡迎晚餐會ニ出席ス。和氣霽々ノ中ニ乾杯談笑數刻、9時前散會トナツタ。

重ナル來賓出席者芳名(五十音順)

足立文太郎、磯部喜右衛門、伊藤弘、木原卓三郎、戸田正三、中西龜太郎、波多腰正雄、林喜作、星野貞次、松本信一、盛新之助ノ諸氏。